

科目名	メディア文化論特講	担当者	ホリエ 堀江 ヒデフミ 秀史	期間	通年	単位数	4
-----	-----------	-----	-------------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	インターネットが台頭して以降、現代のメディア状況はさらに複雑化し多様化したように見える。本科目では、メディアのなかでも主たる位置を占める〈映像〉に注目する。現代にいたるまで、〈映像〉がどのような歩みをたどって来たのか、技術的、思想的な背景を学び、現代のメディアにアプローチする基盤となる知識と方法を習得することを目指す。前期では、その技術的な発展の歴史を学び（19世紀末まで）、後期では、1960年代～70年代日本で加速度的な盛り上がりを見せた映像論を読む。これらの学習と同時に、本科目では、自国の言語（この場合は「国語」としての日本語）を用いた文献の操作方法を学ぶ。また、〈映像〉を〈言語〉で表わす営みである映像論（映像の批評）を精読し、かつ自らも書くことで、「日本語」で思想を表現することの意味についても問い直してみたい。【日本大学教育憲章ルーブリック：A-3:1, A-3:2, A-3:3, A-4:1, A-4:2, 】		
到達目標	<p>【一般目標（GIO）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1960年代～70年代日本の映像文化に関する知識を得る。</li> <li>個別の映像作品に対して、批判的に思考する視座を得る。</li> <li>自らの抱く批評的な考えを説得的、論理的に展開するための学術的な書き方を身につける。</li> <li>メディアの歴史を学び、現代のメディア状況を相対化して思考する習慣をつける。</li> </ul> <p>【行動目標（SBOs）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>映像技術が生まれるに至る過程を、適切な人名及び仕組みの名称を使って説明できるようになる。</li> <li>1960年代～70年代日本の映像文化に関する知識を得る。同時代に問題にされた作品や人物を三項目以上説明できるようになる。</li> <li>「引用」とはどのような営みであるか、自分の言葉で説明できるようになる。</li> </ul>		
学修方略 (方法)	<p>【学修方略（LS）】</p> <p>教材と関係資料を読み、課題レポートを、教員とのやりとりを経ながら、年間計四本提出してもらおう。途中、自ら国会図書館その他で関連資料を調べに行く必要がある。自習、自主研究、レポート作成が本課目の学修方略となる。基本教材、参考図書以外に必要な資料は、履修後（4月半ば以降）にメール等で適宜指示、配布する。</p> <p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】</p> <p>毎回のレポートに対して、内容面、形式面について具体的な添削を施しフィードバックする。やりとりはmanaba folioを通じて行なう。</p> <p>【準備学修項目と準備学修時間（レポート一本あたり）】</p> <p>教材の学修：10時間 調査、資料集め：20時間 レポート執筆：10時間 最終稿までの添削と執筆のやりとり：10時間</p>		
スケジュール	<p>&lt;前期&gt;教材1を使用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>レポート課題1の初稿を5月末までに、最終稿を前期締切日（9月19日）までに提出。</li> <li>レポート課題2の初稿を7月末までに、最終稿を前期締切日（9月19日）までに提出。</li> </ul> <p>&lt;後期&gt;教材2を使用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>レポート課題1の初稿を9月末までに、最終稿を後期締切日（1月14日）までに提出。</li> <li>レポート課題2の初稿を11月末までに、最終稿を後期締切日（1月14日）までに提出。</li> </ul>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	80%	1、学術論文としての体裁（引用の方法、注の付け方など）、 2、論理構成（説得的な論の展開となっているか、文章が読みやすい順番に並んでいるか）、 3、独創性（問題設定、解釈の内容と方法、文体など） 上記三つの観点から、総合的に判断する。
	観察記録	20%	レポート作成過程での質問や、レポート添削の対応
履修者への要望	<p>映像文化に関する予備知識は必要としない。不明な点、分からないことに対しては、メール等で随時対応するので、積極的に連絡をとること。但し、自ら調べる能力を高める意図もあるので、方法は提供するが、直接的な情報は自ら図書館へ出向くなどして執筆を進める必要がある。</p> <p>レポートは、草稿から最終稿にいたるまで、教員とのやりとりを通じて段階的に進めること。従って、執筆は計画的に進めること。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	<p>1-1、吉見俊哉 ISBN 978-4-641-12487-5 税抜 1800 円            著者名： 『メディア文化論 メディアを学ぶ人のための15話 改訂版』(有斐閣アルマ、2012年)            教材名： 1-2、飯田豊編 ISBN 978-4-7793-0532-0 税抜 1900 円            『メディア技術史 デジタル社会の系譜と行方 改訂版』(北樹出版、2013年)</p> <p>1-1は、メディア論における学問的な関心を、体系的に学ぶことができる。            1-2は、絵や印刷、音を含む、表現やメディアの物理的、技術的な歴史を概観できる。</p>
参考図書	<p>岩本憲児、高村倉太郎監修『世界映画大事典』(日本図書センター)＝図書館で適宜関係項目を読むこと。            安友志乃『写真のはじまり物語』 雷鳥社、2009年</p>
履修上のポイント	<p>身体感覚として理解し易く、再現も比較的容易なアナログ技術としての映像の発達史を学び直すことで、デジタル技術が遍く行き渡っている現代を相対化する視点を養ってほしい。ただ歴史を「勉強」するのではなく、現代において得られたもの、失われたものは何かといったかたちで、現代に直結する問題であるという意識を持つこと。</p>
レポート課題 1	<p>写真技術がどのようにして生まれたのか、基本教材等を参照して、歴史的な概要をまとめなさい。2000字以上。  <b>留意点：</b> 科学(化学)的な観点は最小限に留め、人文学的な観点からのみ論じれば良い。(誰が、いつ、どのように生み、その社会的な反応はどのようなものであったか等)</p>
レポート課題 2	<p>課題1を発展させる形で、写真技術にどのような要素が加わって、映画メディアが誕生したのか、概要をまとめなさい。4000字以上。  <b>留意点：</b> 「定着」、「投影」、「動き」という三つの観点から論述すること。</p>

基本教材 2	
教材の概要	<p>著者名： 中平卓馬 ISBN 978-4-480-09110-9 税抜 1200 円            教材名： 『なぜ、植物図鑑か 中平卓馬映像論集』(ちくま学芸文庫、2007年)</p> <p>中平卓馬(1938-2015)は、日本の写真家であり、批評家である。盟友の森山大道とともに、「写真とは何か/何であるべきか」という根源的な問いを抱き、思索を続けた。主に1960-70年代に、先鋭的な批評を著し、写真実作でそれを実践した。アルコールの過剰摂取で昏睡し言葉をほとんど失った1977年以降も、写真を撮り続けた。本書は、その中平が1973年に刊行した評論集の文庫化である。</p>
参考図書	<p>『中平卓馬 来たるべき写真家』(KAWADE 道の手帖)、河出書房新社、2009年</p>
履修上のポイント	<p>本書に収録される、〈映像〉にまつわる様々な論考を通じて、中平が一貫して主張することはなにかを考えて欲しい。写真や映像がマスメディアを通じて広がることでわれわれの意識にはどのような変化が生じるのか。それをいかに克服することが可能か。中平の評論を味読し、自らも映像批評を書くことで現代メディアにも応用可能な批判的思考を身につけてほしい。</p>
レポート課題 1	<p>「基本教材2」に集められた批評の内、興味のあるもの1~2本について、詳細に分析しなさい。「詳細な分析」の内容については別途指示。(2000字以上)  <b>留意点：</b> 写真論、テレビ論、映画論、広告論等があるので、自身の興味のある分野の論文を選ぶこと。論文中で言及される映画、小説等については、原資料に戻って確認し、レポートに反映すること。即ち、基本教材を超えて自ら調べて資料に辿りつき、それに触れる(観る・読む)必要がある。調べ方についても別途指示する。</p>
レポート課題 2	<p>巻頭論文「なぜ、植物図鑑か」の議論に関連付ける形で、任意の映画一本(自ら選ぶこと。但し、特別な理由がない限り、実写映画とする)を、自由に論じなさい。3000字以上、上限なし。  <b>留意点：</b> あらすじの説明に終始しないこと。つまり、それが「小説」とか「演劇」とかでなく、「映像」であることの意味を考え、それを中心に論じること。その映画を観ていない人が読んで「観たい」と思わせられればなお良い。</p>